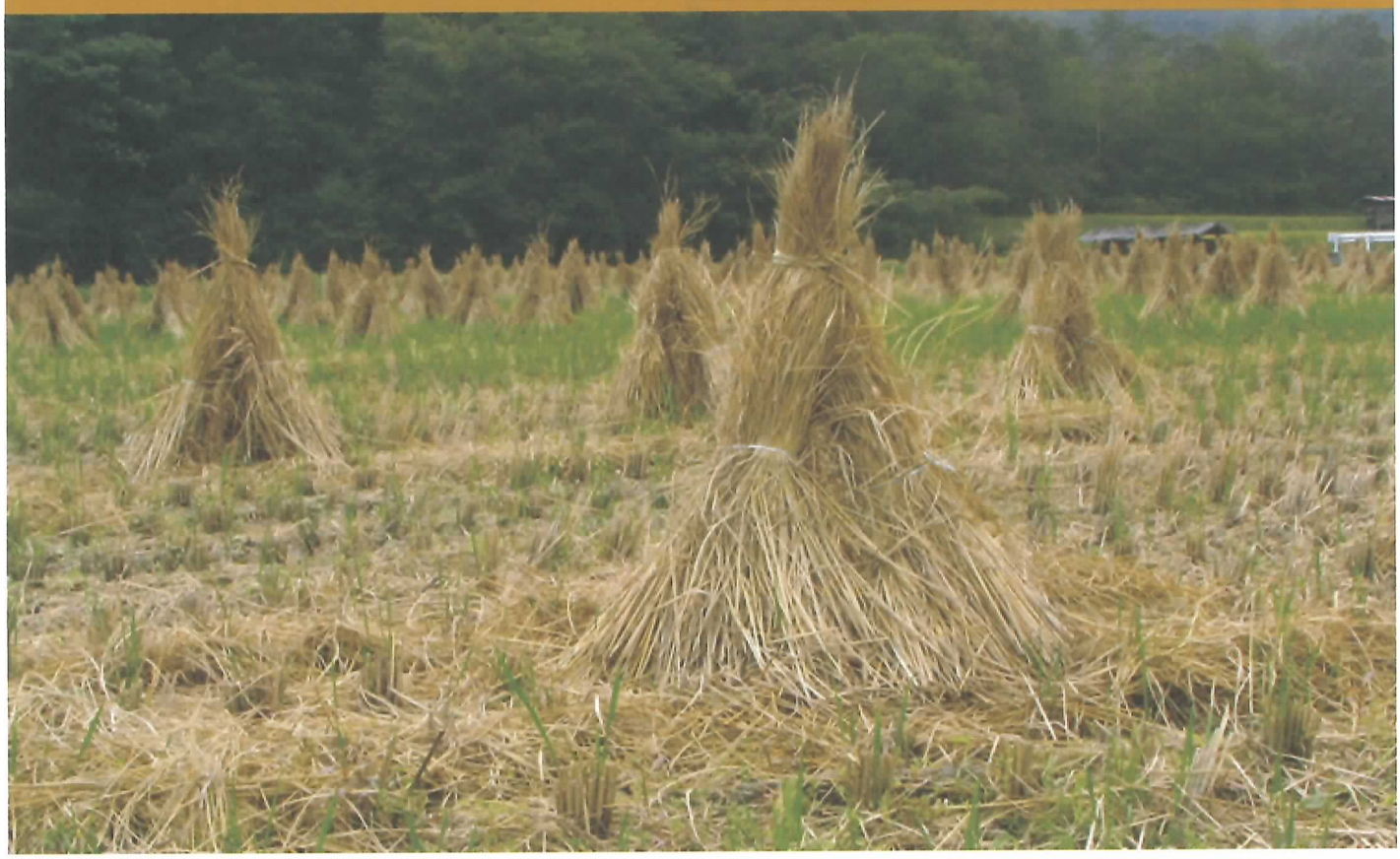
呉工業高等専門学校　図書委員会

図書だより

No.44 2004.11.15



もくじ

巻頭文

「電子図書館」…… 図書館長　野村　利英　2

読書感想文

「理由」（宮部みゆき著）を読んで …… E１　川頭　弘幸　3
「夏の流れ」（丸山健二著）を読んで …… E２　前田　昌宏　3
「豊かさとは何か」（暉峻淑子著）を読んで …… M３　菅原　喬史　4
「往生の物語―死の万華鏡「平家物語」（林　望著）を読んで …… M４　宮本　一真　5

第1回校内読書感想文コンクールを終えて…… 選考委員・図書館長補　小助川　元太　6

留学生が紹介する外国の図書館

「私の図書館」…… C３　ヘン・サルピソット　6

新任教職員の随想

「読書の薦め」…… 一般科目（国語）　新美　哲彦　7
「読書のすすめ」…… 機械工学科　森　貞雄　8
「本で色々な事を知ればワクワクする」…… 環境都市工学科　橋本　堅一　8

在外研究員報告

「外国の図書館紹介」…… 一般科目（英語）　江口　誠　9

新着図書10選……10－11

お知らせ……12

1　平成15年度　図書館利用状況について
2　第２回呉高専文化セミナーについて
3　冬季休業中の長期貸出について

編集後記…… 図書館長補　井上　浩孝　12

巻　頭　文

電子図書館

図書館長
野　村　利　英

私が図書館長を拝命して，早いもので一年半が過ぎた。その間，他の大学や高専の図書館を見学し，図書館会議に出席して，いろいろなことを勉強した。私は本を読むといえばほとんど専門書であったので，自分が必要とする本以外はほとんど目を通すことはなかった。本は「心の食べ物」と以前読んだ何かの本に書いてあったけど，今思えば私はずっと偏食をしていて，必要な栄養素もとらず，一種の栄養失調になっていたに違いない。図書館にあまり足を運ばず，図書館に蔵書が何冊あるかさえ知らなかった。そんな何も知らない私がいきなり，図書館長を引き受けてしまった。

前置きが長くなったが，少しずつ勉強をするに従い，特に最近は「大変なときに図書館長を引き受けた」と感じている。

高専図書館は，本来「学習」「教育」「研究」を支援するために存在していた。しかし，科学技術が急速に進んできた中で，研究・教育に係わる情報検索の効率化が要求され，図書情報の電子化，すなわち電子図書館への移行を考えないと，高専図書館としての機能を発揮できなくなると考えている。

国立高等専門学校協会・施設設備委員会（呉高専担当）は1988年３月に「情報化時代における高専図書館のあり方について」をまとめて出版している。そこで述べられている「電子図書館の概念」を転記すれば＝すべての情報をディジタル化し，ネットワークを介してすべての情報にアクセスすることができる図書館＝となる。電子図書館は，電子化された資料やデータベースがネットワーク経由で提供されるため，時間や場所に制約されずに利用可能であること，複数人が同時に利用できること，検索機能の附加等によって利便性が増加すること，等利用者にとって様々なメリットがある。1996年７月に学術審議会より「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について」の建議をはじめ，2001年３月31日閣議決定の「科学技術基本計画」においても電子図書館的機能の整備の重要性が述べられており，高等教育機関や研究機関での電子図書館への積極的な取り組みが求められるにいたった。しかし，これには莫大な予算化が必要であり，一朝一夕に成し遂げられるものではない。

そこで高専図書館としては，ネットワークを通じてアクセスし，世界のさまざまな資料源を，最新の方法で利用できるようにすることが非常に重要になってきている。

現在呉高専では，今年１月から MathSciNet，４月から「新外国雑誌目次データベース」と Science Direct を，使用料を払って利用している。さらに10月からは新しく，JDream の導入を決めた。JDream は，今年度は無料であり，さらに①世界50ケ国以上からの情報を収録②外国文献にも日本語の抄録が付いている③検索も日本語で OK④切り出し語を意識しない全文検索システム⑤データのダウンロード＝エクセル形式で簡単分析⑥社会人になっても研究開発で使う機会がある。等の多くの特徴をもっている。これにより，特に５年生の卒業研究や専攻科生の特別研究に寄与したいと考えている。これで，呉高専の図書館はある程度「電子化」が進んだと考えられる。他に国立情報学研究所の NACSIS-IR の課金制に登録しているが，宣伝不足のためか利用者はいない。他の34高専はこれの定額制（年間５万円）に入って利用している。呉高専でもぜひ利用してもらいたい。将来はもっと色々導入し「特色ある電子図書館」を目指して，関係者にできるだけ図書館を利用してもらいたいと願うものである。

読書感想文

理由(第120回直木賞)

宮部 みゆき 著

電気情報工学科１年
川 頭 弘 幸

芥川・直木賞受賞作品を読んで感想文を書け――と言われたとき，この本が自然と頭の中にうかんだ。この本を書いた作家は宮部みゆきさんで，多くのベストセラーを出している有名な作家だ。昔からこの人の書いた本を読んでみたいと思っていたので，すぐにこの作品が浮かんだのであろう。

この作品は，荒川のマンションでおこった一家四人殺しの事件を核に，四つの主な話がからまりあってできている。一つめは，荒川のマンションの住人，小糸一家の夜逃げの話。借金がたまったために競売にかけられた家を石田真澄が買うが，占有屋に邪魔され，事件の犯人にされるまで。これが二つめ。三つめは，占有屋に雇われ，小糸一家のかわりに家に住むが，事件の被害者となる話。最後は被害者の一人（実は犯人）ともみあいになり，誤って突き落としてしまう宝井綾子とその一家の話。それぞれの話はうまくからみあって一つの話を形成しているが，それぞれの登場人物についての詳しい話，家族関係や，この事件にかかわった理由などが，インタビューのようにして書いてあり，読者に現実味を感じさせる工夫をしている。

自分は，特に二つめの話の不運な男，石田真澄に興味を抱いた。似ているところがあると思ったからだ。他人に流されやすく，しっかりしたもの，「自分はこういう人生を生きていくんだ」というものがなく，フワフワとしている。真澄は，自立のことで息子とケンカしたときに，娘に言われた，「うちはすっごい財産があって，誰かがまもらなくちゃいけないこともないんだから，みんな自由にしてもいいんじゃない？」という言葉にショックを受け，「オレにはなんの財産もないのか」と一人落ち込む。それが家を買おうという気持ちに変わり，事件に巻き込まれるのである。自分もそんなことがあった。変なプライドにつき動かされて，とんでもないことをしたりしたことがある。やはり，目標がなくフワフワしているからだろうか。母にも言われた。「高校に受かってから，うかれとるんじゃないんか」と。卒業まで五年あるからって，余裕を持っている，というより，苦しいこと，面倒くさいことから逃げている自分があった。やはり，それじゃダメだ。落ちこぼれるのはすごく楽だ。だが，振り返ってみれば，やるべきことがたくさん残っている。

自分は，この本の登場人物のようにはなりたくない。中学のときには高専に入ろうと必死だったのに，今はなんだか義務的に生きているような，いや，生かされているような気がする。自分の力で生きている実感がない。

この本を読んで，自分の心がかなり堕落していることを痛感した。自分の中で，こういう人になりたいという理想はある。まだまだ遠いところだけれど，それは確実に存在し，今の自分を見つめている。夢だってある。そうだ，自分にはまだ夢が，目標があった。遠すぎて分からなかったのだろうか。自分の中では，目標は近いうちに到達すべきところ，夢は遠い未来に到達したいところという格付けがされていたが，そんなものはただの現実逃避だった。これでは夢は叶わない。最近努力が足りないのも，フワフワしているのも，そのせいだろうか。

夢への道のりは長い。多くの努力がいるし，失敗もたくさんするだろう。道の先はもやで見えないけれど，その先がいいものになるか悪いものになるかは自分しだいだ。まずは自分との戦いだ。――やるぞ。

夏の流れ(第56回芥川賞)

丸山 健二 著

電気情報工学科２年
前 田 昌 宏

とくに読みたい本もなかったし，季節は夏なのでこの本を借りてみた。内容は，季節や話の筋がちがう三つの話からなっていたが，どれも命に関係した話だった。

死刑の執行を仕事の一部とする人はどんな気持ちで職務にあたっているのだろう。三つの中の一つがそんな話だった。仕事であっても，人間を殺すことにかわりはない。罪にとわれないが人殺しは人殺しだ。だが，死刑という刑がある以上だれかがそれをしなければならない。人を殺すことに抵抗を感じない人は普通いないと思う。死刑囚からすれば，自分を殺すことでお金をもらう看守達を憎く思うだろう。しかし，自分はどうしようもないくらいの悪いことをした。その二つの気持ち

にはさまれ，死への恐怖しかわいてこない。僕が死刑囚ならきっとそうだ。それをわかって，すべて覚悟して看守は死刑をおこなう。囚人にも大切な人がいて，逆に看守にも大切な人がいて食べていくには仕事をするしかない。本当に複雑だろうと思う。文中では死刑の瞬間が簡単に書かれているが，人の命はほんの一瞬で簡単に消えるほど弱いものということを表しているように見えた。そして，看守達の会話に釣りの話がよくでてくる。気をまぎらわせるために釣りに行っているようだが，大切なのはそこなんだと思った。仕事であっても人を殺すことに慣れてしまい，何も感じなくなれば，人はそこで終わりだ。自分のしていることを少しでも自覚，理解することは大切だと考えた。

二つ目の話は主人公の祖母が死ぬ話だった。主人公は人前では平気なふりをしていた祖父が，夜に一人で泣いているのを見てしまうのだが，祖父がなぜそれまで泣かなかったのか理解できない。長年つれそった人がいなくなるのだから悲しくないはずがない。泣いてしまえばいいのにと思った。もしくはその時にならないとわからないことがあるのか。別れの悲しみとともに今度は自分がいなくなってしまうことも考えると思う。孫や残された人が自分と同じように悲しむことになる。それ以前にどこにも自分が存在しなくなることに僕なら悲しさを感じる。悲しまれることは悲しいのかもしれないとも思った。

三つ目はある夫婦が人工妊娠中絶をする話だった。妻の反対をおしきって人工中絶をさせてしまうのだけれど，早すぎるような気がするんだ，と，気がするだけでそうさせてしまう夫もどうなんだと思った。妻は経済的に難しいなら働いてお金をつくると言っているのにそんな無理してほしくないの一点張りで意思は変えない。人の幸せの定義がどんなものか知らないが，彼も彼なりに考えて今後幸せになると思う道を選んだんだと思う。幸せとは何なんだろうと思った。決して彼も彼女も悲しくないわけがない。その後にあるのは幸せなのだろうか。悲しみは幸せに変わったりするものではなく，悲しみという形で残ってしまうものだと思うのだがそれは僕だけなのだろうか。だから僕はこの話にあまり納得いかなかったりする。すっきりしない感じだった。

今は命のことや死ぬことなんて考えることは少ないけれど，いつかはそのことで悲しんだり考えたりするのかなあと思った。

豊かさとは何か

暉峻　淑子　著

機械工学科３年
菅　原　喬　史

「日本は経済大国である」という言葉を聞いたことがない日本人は，おそらくほとんど存在しないだろう。

“経済大国”日本では，大量のカネやモノが常に消費され，同時に企業間の激しい競争が行われている。また，私たちはこの競争の恩恵にあやかり，最新の商品やサービスを手に入れることができる中で生活している。

こんな日本で何一つ生活に困らず育ってきた私は，日本が“経済大国”であると同時に，“豊かな国”であるとも信じて疑わなかった。

しかし，今回読んだ『豊かさとは何か』では，私のこんな考えとは裏腹に，日本は経済大国であっても豊かな国ではないと述べられている。日本人は老後の不安や受験戦争といった社会的不安に常に悩まされ，また心や時間にゆとりを持つことが困難なため，豊かな人生，生活を送れていないというのだ。

たしかに日本は資本主義社会であるがゆえ，私たちは様々な競争に常にさらされ，同時に多くの不安に悩まされている。しかし私たち日本人はひとつひとつの不安を乗り越えようという努力はしても，日本社会の構造上の問題点を洗い出し，現在抱えている不安はどこからきているのか，あるいはどのように社会の構造を変えたらこの不安はなくなるのかという，根本的な解決を目指す努力はあまり行われていないのが現状ではないだろうか。

ここでは二年前に社会的な問題となった“ゆとり教育”を例に挙げ，私の疑問を考えてみる。まずこの事件のあらすじはこうだ。

平成十四年度の学習指導要領の改正で，公立の学校では，週五日制が導入され，指導要領からいくつかの学習項目が削除された。政府や文部科学省（文科省）はこの改正による教育を“ゆとり教育”と呼び，ドイツのようなゆとりのある教育を目指した。しかしマスコミや世論の多くは子供の学力低下を招くとして，“ゆとり教育”に反対した。また改正後もこの教育はあまり国民に浸透しなかった。結局は私立の学校や塾へ子どもを通わせる家庭が増え，それらの経営者が利益を上げる結果となってしまった。この結果を見た文科省は，

次回の指導要領の改正で，削除された項目の一部を復活させると発表し，世論の意見に譲歩した。

当初，文科省は一人一人の子供の進度に合わせた教育ができるように，このような改正を実施したのだろう。また同時に受験戦争を緩和し，子供たちの生活に幅を与えることができるのではと考えたのではないだろうか。

しかしこれまで受験戦争の激化に“対応”することばかり考えてきた人々とって，“ゆとり”を与えるという考え方は目障りだったのかもしれない。たしかに学力低下は不安な要素だが，この改正をきっかけに塾通いなどで疲れている子供のために，ゆとりのある教育環境を整えることを私たちはもっと考えるべきだった。

どうやら自分や家族の生活にゆとりを与えることは，私たちにとってかえって不安な要素になってしまうようだ。常に競争が起きる日本社会で手を抜く（ゆとりを持つ）ことは，自分が不利となる要素を増やすことになり，競争から脱落する可能性が上がると考えてしまうのだろう。また福祉などの社会基盤となる制度が欧米ほど充実していないのも，このような傾向に拍車をかけているものと考えられる。

今後，私たちは豊かな社会を目指し，ゆとりのある生活とはどのようなものなのか考える機会をもっと持たなければならない。また政府も経済成長ばかりを目標に置くのではなく，社会基盤の充実を目指すことにももっと力を入れなければならないだろう。

今回，私は『豊かさとは何か』を読んで，日本社会や自らの生活の問題点を改めて考えさせられた。著者は本書内で日本を離れてみると，かえって日本の姿が客観的に見えることがあると述べている。私もいつか海外を訪れて，日本が今後進むべき道を考えてみたい。

往生の物語—死の万華鏡『平家物語』

林　望 著

機械工学科４年
宮　本　一　真

このたび自分が選んだ，この『平家物語』に関する作品。内容はタイトルが示すとおり，平家物語のネガティブな部分を題材にしたもので，平家物語を空前絶後の「死」の大文学としてとらえ，その主要な登場人物11人について，そのさまざまな最期から逆照した彼らの生き方を，「死への道筋」と見ることで新しい面白さを発見していく，というもの。

基本的なこの本の話の進め方は，物語の進行順に登場人物の死に関する原文をピックアップし，その部分を著者が読みやすく訳し，最後にそれぞれの場面での彼らの死に様について，著者の思うところや見習うべき立派な往生の仕方についての解説が入る，といったパターンであり，それが256ページにわたって続く。正直なところ，初めに手にとって大雑把に目を通したときは，くどくどとしていて，陰気な内容に思えた。しかし，じっくりと読み進めていくと，これが思ったより面白い。

まずはそのバリエーションの多さ。「清盛のあつち死に」などの有名どころから，歴史や古典の授業では習わなかった人物の死に様まで，平家物語を普通に読んでいても気づかないようなところにまで触れている。さらに１人の人物の死について，要所要所に入ってくる解説の緻密さや，この死によって出た周囲への影響，そして，その表現のしかたがいかに高度なものであるかといった，見過ごしがちなところまで幅広くカバーされているので，深く考えることができる。

特に面白かったのは，維盛の死の場面。維盛といえば水鳥の羽音を源氏の鬨の声と間違えて，戦に及ばずして敗走したことで有名な人物。学校で習うぶんにはここで彼の出番は終わりで，その後のことを知らない人が多い。その後，戦下手な彼は，連戦連敗し，妻子を残したまま都落ちする。そして，最後には哀れな死を迎えるのだが，そこまでの話が面白い。とりわけ感動するのが，最後に妻子と取り交わした手紙である。妻への遺言めいた手紙の内容はもちろんのこと，２人の子供たち対して，まとめて１通の手紙を送ったのではなく，それぞれにまったく同じ文面の手紙を書いて送ったというところに来ると，胸に迫るものがある。そうして子供たちもまた，揃って同じ返事を書いたというところも哀しい。つまり，維盛の「死への道筋」は，ひたすら家族との別れの辛さとの戦いだったということをうかがい知ることができる。

今までは，「ここで彼は死んでしまいました」で済まされていた内容に，これほど深く入り込んだことがなかったので，この本はかなり新鮮だった。平家物語のような文学作品は，本当に噛めば噛むほど味が出るものだと実感できた気分だ。

第１回校内読書感想文コンクールを終えて

選考委員・図書館長補
小助川　元　太

国語の時間にアンケートをとってみると，「読書が嫌い」「文章を書くのが苦手」と書く学生がけっこういる。かくいう私も，読書は好きだが，文章を書くのはあまり好きではない。高校時代の読書感想文の宿題などは大の苦手であった。そんな私が文章を書くことを仕事としているから不思議なのだが，書くことは今でも好きではない。私のように作文が仕事になってしまうと，苦痛を感じることの方が多いのだ。それでも，自分の書いた論文や文章が評価されると，つい嬉しくなり，次はもっといいものを書いてやろうなどと思ってしまう。

さて，呉高専の『図書だより』では，これまでも学生諸君の読書感想文を掲載してきた。それを，あえてコンクール形式にしたのには意味がある。ちゃんとした手続きを通して選ばれ，表彰されることが，掲載された学生の自信につながり，また，他の学生にとっても励みになるからだ。

今回の選考方法は，各学年の担当委員によって選ばれた候補作品を，選考委員会で検討したうえで決定するというものであったが，３年生までの候補作品は，ほぼ全学生から選ばれたものである。なかでも，１，２年生の候補作品については，担当委員が選んだ上位８名について，学生による投票を行った結果に基づいている。その投票用紙に書かれたコメントで，最も多かったのが「この感想文を読んで，その本を読んでみたいと思った」というものだった。

読んでもらえばわかるが，今回優秀賞に選ばれた４人に，特別に文才があるわけではない。本と出会うことで生まれた自分の思いが，読み手に伝わったから選ばれたのである。それは彼らが真剣に自分自身と向き合った結果であり，その思いを正確に伝えようとして苦しんだ結果なのである。

読書感想文を書くのに特別な才能などいらない。誰にでも受賞のチャンスはある。新たな自分の可能性を発見するためにも，ぜひ来年度もこの読書感想文コンクールに積極的に参加してほしいと思う。なお，今回は初めての試みのため，情報が行き渡っていなかったのか，残念ながら５年生，専攻科生の応募がなかった。来年度はより多くの学生が参加してくれることを期待している。

留学生が紹介する外国の図書館

私の図書館

環境都市工学科３年
ヘン・サルピソット

図書館というと，勉強ばかりのつまらないところと思う人が多いかもしれませんが，私にとっては面白く，とても大切なところです。今回は私の母国カンボジアの図書館を紹介します。

カンボジアは，日本と違ってまだ発展途中の国なので，都市以外の学校は，建物や本などが足りません。私が通っていた高校は田舎にあり，図書館が小さく，教科書を買えない学生に貸すための本しか置いてありません。勉強したくても参考本が少なかったので，そのころの私は，都市の学生をうらやましく思っていました。

高校卒業後は，カンボジアの都市プノンペンにある大学に進学することになりました。そのときに私が使っていた図書館は２つあります。１つは私が入学した技術大学の図書館で，もう１つは一番大きいといわれている，Phnom Penh Royal University の図書館です。

私の大学の図書館は，他の図書館とは違い，２つの建物に分かれています。１つは普通の図書館と同じで，たくさんの本が専門の順番に並んでいます。場所も広く，静かで，入ったならば誰でも勉強しようという気分になってくるでしょう。参考本もたくさんあり，外国の本もいっぱいあります。それでも読みたい本がなかった場合は，Phnom Penh Royal University の図書館に探しに行きます。さて，私の大学の図書館のもう１つの建物は，勉強に疲れた人のための場所です。そこにはインターネットのできるパソコン室と，ビデオ室があります。また，それらの部屋の外側は，新聞・雑誌・漫画などが置いてあり，チェスや他のゲームなどができるような広いスペースになっています。そのうえ，そこには外国語を学ぶための本もたくさん置いてあります。なお，図書館は入館は自由ですが，本を借りるにはカードが必要です。

図書館はいろんな情報が集まるところで，知識を得るのに大変役立ちます。リラックスもできるし，勉強するには一番いいところだと思います。まだあまり利用していない皆さんも，ぜひ図書館で勉強してみてください。

新任教職員の随想

読書の薦め

一般科目（国語）
新　美　哲　彦

中学・高校時代，読書は現実逃避だった。大学の時，読書は時間の無駄だった。大学院の時，読書は研究の材料探しだった。そして今，僕は読書をマイペースに楽しんでいる。

君らは，タイムマシンがすでにある，しかも君らのごく身近に，と言ったら笑うだろうか。

僕らが言語を発明した時，僕らは個人の体験を，声の届く範囲にいる他人に伝えることができるようになった。僕らが文字を発明した時，僕らは個人の体験を，場所や時を越えて他人に伝えることができるようになった。ついでに言うと，文字が発明されたおかげで，僕らは安心して様々なことを忘れられるようになった。

先ほどの話に戻るが，タイムマシンは本（文字で書かれたもの）である。なんだ，と言うかもしれない。でも，たとえば源氏物語を読み，森鷗外を読む時，僕らは眼前に平安の人々，あるいは明治の風景が立ち現れるのを感じ，枕草子を読み，芥川龍之介の随筆や宮沢賢治の詩を読む時，清少納言や，芥川，賢治がそこに生きているのを感じるだろう。その間には千年なり百年なりの時が経っているのだ。僕らが過去に行くと考えても，過去の思想や風景が現在に現れると考えてもいい。これはよく考えるとすごいことではないだろうか。

また，現在，世界中で排他主義，異質なものを排除しようとする動きが盛んになっている。だが，同質な集団，同質であることが強要される集団（一つの考え方しか許されない集団）に進歩や変化はないし，なによりそのような中で生きるのは息苦しい。そんな時，世界の中にはいろいろな考え方や視点があり，いろんな人間がいるということを知る意味で，読書は有効であり，重要である。世界は西部劇や時代劇のように単純ではないのだ。

今年は夏休みの前半に金城一紀の『ＧＯ』（講談社文庫）と夏目漱石の『三四郎』（ちくま文庫，新潮文庫，岩波文庫など）を並行して読んだ。そして，夏目漱石が描いた「国家」「個人」「家」などの問題点が『ＧＯ』に引き継がれ，明治時代の原因が結果として『ＧＯ』に描かれているのを見て複雑な気持ちになった。

その『ＧＯ』には夏目漱石『吾輩は猫である』（ちくま文庫，新潮文庫，岩波文庫など）の「三角なものが大和魂か，四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示す如く魂である。魂であるから常にふらふらしている」「誰も口にせぬ者はないが，誰も見たものはない。誰も聞いた事はあるが，誰も遇った者がない。大和魂はそれ天狗の類か」という言葉が引かれている。

似た思考として，近世の上田秋成は，本居宣長の有名な和歌「敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山桜花」に対して「やまとだましいと云ふことをとかくにいふよ。どこの国でもその国のたましいが国の臭気也」（『胆大小心録』・日本古典文学大系『上田秋成集』所収）と述べる。

漂泊の詩人，種田山頭火には「街はおまつりお骨となつて帰られたか」（「銃後」『山頭火句集』ちくま文庫）という句があり，最近ではザ・ブルーハーツに「生まれた所や皮膚や目の色で　いったいこの僕の何がわかるというのだろう」（「青空」より）という歌詞がある。

また，金子光晴には

「群衆のなかで，侮蔑しきったそぶりで，たゞひとり，反対をむいてすましてるやつ。
おいら。
おっとせいのきらひなおっとせい。
だが，やっぱりおっとせいはおっとせいで
たゞ
「むかうむきになってるおっとせい。」」
（「おっとせい」『金子光晴詩集』岩波文庫）

という詩がある。

どれも多様性の大切さ，自分で考えることなく集団とともにあることの怖さを訴える言葉だが，こんな言葉を知ってかっこつけるためだけでも読書には意味がある。

読書のすすめ

機械工学科
森　貞　雄

「何度も笑った本」

自分の趣味にあった作品を見つけたとき，最後に近づくにつれ，このまま読みきってしまうのが惜しいような気にならないだろうか。それがシリーズもので，既に亡くなっている方の作品だったら…

私の場合はドイルのシャーロックホームズ，クリスティのポワロ，池波正太郎の剣客商売，朝永振一郎のスピンはめぐる　等々がそうだ。どれもが一気に先を急いで，時には読み飛ばしながらも，終わりに近づくにつれ読みたくないような気持ちも強くなる。読み終わったときの「もう新作は読めないのだ」という寂しさは何ともいえない。

「私はそれを我慢できない」
鷺沢萠（さぎさわ　めぐむ）

数年前，仕事が一段落したとき，手近にあった文庫本を読み始めたところ，面白くてとまらなくなり一気に最後まで読んでしまったのがこれである。あとがきで著者は「怒ってるヤツ」ばかりを集めたと言っている。確かに怒っているが，その理由が共感でき，しかも笑える。たとえば，有名レストランで白ワインを飲みたいと思った著者に対してウエイターが「イタリアワインは赤がおいしいので（白はおいてない）」といわれたとき「飲む人間に決めさせてくれ，ゆうねん」とつぶやく。また，チーズを頼んで，魚介類にはあわないといわれ「でもほしいんだからつべこべ言わずにもってこい」という。食べ物に関することばかりかと思われるかもしれないが，話題は食べ物に限らない。著者自身や周辺の人の失敗談も多い。それがために著者は友人に言われた。「まさか，これ，本のネタにするためにやったんじゃないでしょうね。」こう書くと少しも面白くないがおかしさは原文で。

本で色々な事を知ればワクワクする

環境都市工学科
橋　本　堅　一

世界にはどのくらいの数の職業が存在するのであろうか。人生で，そのうち何種類の職業の人と出会うのであろうか。ほんの一握りに過ぎないのではなかろうか。こういったことに興味を持たせてくれ，色々な事を解決してくれるのが本である。

高校まで本があまり好きでなく，夏休みに必ず出る読書感想文の宿題が苦痛であった。大学に入り，なぜか自然に本を手にするようになった。大学時代に印象に残った本は尾崎士郎の「人生劇場」，五木寛之の「青春の門」そして吉川英治の「宮本武蔵」である。これまでの人生に多少なりとも影響を受けたと感じる長編である。

ジャンルはあまり問わないが，そのときそのときに凝るものがある。徳島県の池田高校が高校野球で旋風を起こしたときは故蔦監督の本をいくつかよんだ。私生活で問題を抱えたときは重松清氏の作品を読んだ。啓発的な本としては先ごろ亡くなった雑誌「Newton」の編集長であった竹内均先生の本をよく読んだ。「頭をよくする私の方法」は今も読み返したりもする。畑正憲氏の動物の本もよく読んだ。

作家の知識も興味深い。村上隆氏はいわずと知れた芥川賞作家で現在はその審査員もしているが，「不思議の国のエクソダス」，「最後の家族」，「13歳のハローワーク」というような現在の，方向の異なる題材をテーマにした作品があるし，株に関する本も出版している。瀬戸内寂聴氏は表現が不適切であると一時期文壇から疎外されていたが，今では「釈迦」など独特の描写で支持を得ている。

最近興味を持って読んだ本を挙げれば，綾戸智絵「マイライフ」，小川洋子「博士の愛した数式」，辻内智貴「青空のルーレット」，渡辺公二「心の監督術」，横山秀夫「半落ち」等がある。どれも夢中になって読んだ。本は心を豊かにしてくれる。高校までの私は本の面白さがわからなかったようだ。

在外研究員報告

外国の図書館紹介

一般科目講師　江口　誠

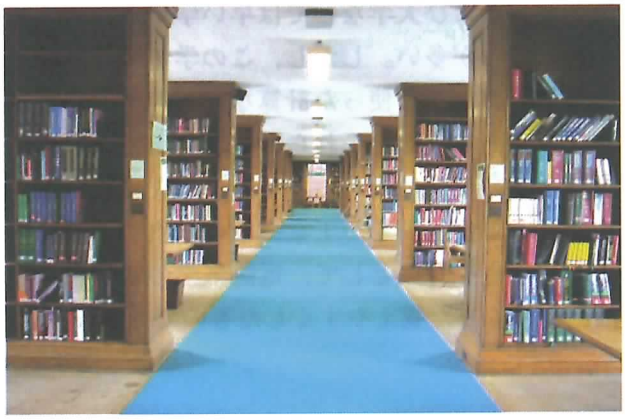
イギリス北西部に位置するマンチェスターは，リバプールとともに産業革命の象徴的な都市として，また最近ではマンチェスターユナイテッドの本拠地として比較的有名ではないかと思います。その産業都市マンチェスターの市街地にキャンパスを擁するマンチェスター大学では，市の中心へと導く Oxford Road の両側に各学部の建物が立ち並び，街と一体化しています。近隣にも大学や各種教育機関が多数あり，さながら若者の街のような印象を受けます。ヨーロッパはもとより，アジア（特に中国）を含め世界中から人々が集まるコスモポリタン的な雰囲気を持つ都市でもあり，大学院やビジネススクールでは特に留学生の比率が高く，クラスの内イギリス人は2割程度という学科もあるようです。

この大学の最も大きな図書館は，19世紀中頃に設立された John Rylands University Library（ジョン・ライランズ大学図書館）です。歴史の古いオックスフォード大学のボドリアン図書館等と比較すれば蔵書数こそ劣りますが，相互貸借や文献コピーサービスが充実しているので，例えば雑誌論文のコピーであれば数日で British Library（英国図書館）から直接自宅に郵送されてきます。最近はインターネットで文献の閲覧ができる E-Journal や E-book のサービスも充実しているため，文献の入手という点ではますます便利になっています。館内は専門分野によって Blue, Red, Green のように色で区分けされており，カーペットもその通りに色分けされています。私が必要な文学・歴史関連の文献は中でも最も広い Blue エリアに集まっていますが，静かで居心地のよい環境を求めて法学・医学関連のエリアによくお邪魔しています。

また，館内のコンピューター設備も充実しています。パソコン数十台が並ぶ computer cluster と呼ばれるセクションが2階から4階の各フロアに設けられ，レポートや論文を執筆する者からメールやネットを楽しむ者までその使い方は様々です。全ての端末にウィンドウズ XP が入っており，もちろん日本語入力も問題ありません。ただ，順番待ちの queue（列）が出来ることが多いのが唯一の問題でしょうか。

John Rylands という名称は，大学キャンパスから少し離れた Deansgate（ディーンズゲイト）にある，The John Rylands Library（ジョン・ライランズ図書館）に由来しています。この図書館は，古い貴重な文献を多く所蔵しているのが特徴で，比較的古い時代の文献を収集している私はこちらをよく利用しています。ただ，本来であればその都度 Deansgate まで出掛けなければならないのですが，幸いなことに建物が補修中で全ての文献が大学図書館の方に移されているため，その必要はなくなりました。

Deansgate の資料は，Special Collection とも呼ばれており，文献のコピーを取ったり借りたりすることはできません。Special Collection にアクセスするためには，大学発行の身分証とともに担当教授等の推薦状が必要となります。入り口には常に警備員が配置され，閲覧室に入るには，盗難を避けるためバッグ等をロッカーに収める必要があります。警備員にドアを開錠してもらって中に入り，司書に ID を手渡し，必要な資料のリクエストをして初めて閲覧が可能となります。さらには貴重な資料を傷つけないようにと，下に敷くクッションと，開いたページを押さえる数珠の形をしたおもりも一緒に手渡されます。利用者にとっては不便この上ないものですが，conservation【保存・保護】のためだと言われれば，納得せざるを得ません。



▲　医学関連図書のエリア

▲　パソコン利用スペース

新着図書10選

あらすじで読む日本の古典

小林保治編著　中経出版

あらすじ本ブームを引き起こした『あらすじで読む日本の名著』の姉妹編。上代の『古事記』から，近世の『雨月物語』にいたる二十五編の代表的な日本の古典の解説とあらすじを収めている。あらすじだけを読むことの是非はあろうが，簡潔な解説とあらすじを読むことで古典への世界が開けることは，読者にとっても，日本の古典に関わる者にとっても嬉しいことである。ちなみに私も一編執筆している。原稿料はまだもらっていない。

（新美　哲彦記）

ドイツを知るための60章　エリア・スタディーズ

早川東三，工藤幹巳編著　明石書店

この『○○（国）を知るための○章』というタイトルでさまざまな国を紹介するエリア・スタディーズのシリーズは，９月上旬で42冊発行されています。今後も続く予定です。このシリーズを薦めるのは，これが単にその国を統計的分析的に説明するのではなく，数名の執筆者のその国に対する想い，肉声のようなものが感じられるからです。編集方針は少しずつ異なるようですが，たとえばこの『ドイツを知るための60章』では，まず特徴的な地域，都市，街道が紹介されます。それがドイツという国の魅力を強く読者にアピールします。次にはバッハ，ベートーベンなど有名人登場で，ドイツ人を身近に深く知ることができます。楽しく読めて，なおその国の魅力を強く感じることのできるシリーズです。

（周藤　剛士記）

ケイン生物学

Mケイン他著　石川統監訳　東京化学同人

中卒程度の生物学の知識で卒業するのは少し悲しい。本書は，基礎生物，医療，環境，生命倫理などの分野を扱う統合的な教科書で，物語を読むようにおもしろく楽しめる。各章は短く，どの章からでも独習できる。特徴は各章末に設けられた「ニュースを考える」欄で，深く考えさせる刺激的な社会問題が扱われている。読み進むにしたがって，科学的な思考力が自然と養えるようになっている。基礎科学の神髄を存分に味わって欲しい。

「バイオテクノロジー」（芦田　嘉之記）

光の鉛筆，続光の鉛筆，第３光の鉛筆…

鶴田匡夫著　新技術コミュニケーションズ

著者が十数年前から光技術関係の雑誌ＯＥに連載している内容をまとめたもので原則として一話読み切り。古いものから新しいものまで著者の興味の赴くまま，趣味で書いたような本です。が，著者の知的好奇心のため古典光学に関するトピックはほとんどカバーされています。後ほど難しくなっていますが，光に興味があるなら一読（一見？）する価値はあります。電磁気（光は電磁波）を学習後に読むとさらによく理解できます。

（森　　貞雄記）

自作ロボット入門

浅草ギ研著　九天社

ラジコンによる４足歩行ロボットの自作方法について初心者向けに分かりやすく説明されている。昨年，卒業研究の学生とともに部品を集め，この本を片手に一台製作してみた。プロポのスティック位置に対応して，４本の足に組み込まれた合計８つのサーボモーターが同時に制御されて前後および左右回転と愛嬌のある歩行をする。ラジコンカーを初めて作った小学生時代の純粋な感動を再び味わう事ができ，この本には感謝している。

（野村　高広記）

例題で学ぶ電磁気学

野路英樹・福永哲也・岸田悟著　森北出版

電磁気学は電気工学の基本であるため，高専や工業高校および大学などでは早い学年から教えているところが多い。しかし，この学年では微分・積分やベクトルを使った計算などの数学的知識が不十分であるため，これらの数学的記述を学生に理解させることは難しい。そのような現状を踏まえて，本書は，高専，工業高校の学生および大学１～２年生を対象として，電磁気学の初学者に理解しやすくまた覚えやすくしたものである。

（井上　浩孝記）

情報学のための離散数学

茨木俊秀著　昭晃堂

本書は情報科学を学ぶに当たって必要な離散数学の基礎部分，論理関数とその応用，グラフとネットワーク理論に関する教科書である。精選したテーマを詳説し，類書では省略されるものにもできるだけ証明を与えてある。一見難解そうだが丁寧に読めば必ず理解できるよう配慮されており，自習書としても活用できるであろう。特に，情報系の大学へ編入学を希望する学生にとって離散数学の知識を補うための良書といえる。

（井上　浩孝記）

最新環境負荷低減の技術とシステム

テラメカニックスと環境問題委員会編

テラメカニックス研究会

本書は「テラメカニクスと環境問題委員会」の3年間に及ぶ委員会活動をまとめたものです。幅広い分野の識者の見解や新技術について多くの情報が集積され，それらが最新の環境負荷低減技術として，また，これからの環境調和型産業のあり方を示す貴重な指針として本書に盛り込まれています。我々一人一人がそれぞれの立場で最新環境負荷低減のために何ができるかを真剣に模索できるための力強い味方になってくれるはずです。

（重松　尚久記）

水の自然誌

E.C. ピルー著　古草秀子訳　河出書房新社

原題は“Fresh Water”，つまり「淡水」。地球上の水のうち，たった3％の淡水が陸上の生命を支えている。水蒸気として空に戻り，凝結して雨や雪として降り注ぐ水が，地中のミネラルなどを取り込み，湖や海に流れ込む。本書は，そんな水循環をはじめ，その途中の川，地下水，湿原，ダムなどでの水の大切なふるまいをわかりやすく描写している。ごく身近な存在の水が，実はどんなに貴重で不思議なものかを教えてくれる一冊である。

（黒川　岳司記）

同潤会に学べ　住まいの思想とそのデザイン

内田青蔵著　王国社

東京の青山通りの都営青山アパートが通りの景色から消え，今は再開発事業が行われている。このアパートは通りの景色を構成し，また同化もしていた。しかし日本の最初期の鉄筋コンクリート造のアパートであるが故に老朽化し，住人にとって快適とは言えなかったであろう。この本は，次々と消えていく同潤会アパートの記憶を止めるのに役立つ。

（岡本　二郎記）

図説　建築の歴史　西洋・日本・近代

西田　雅嗣他編　学芸出版社

書名の通り，この本は図解による建築史の概説書です。建築史の概説書はいろいろありますが，この本は建築史の参考書として内容的にもよくまとまられており，建築学科の学生に是非，薦めたい本の一つです。

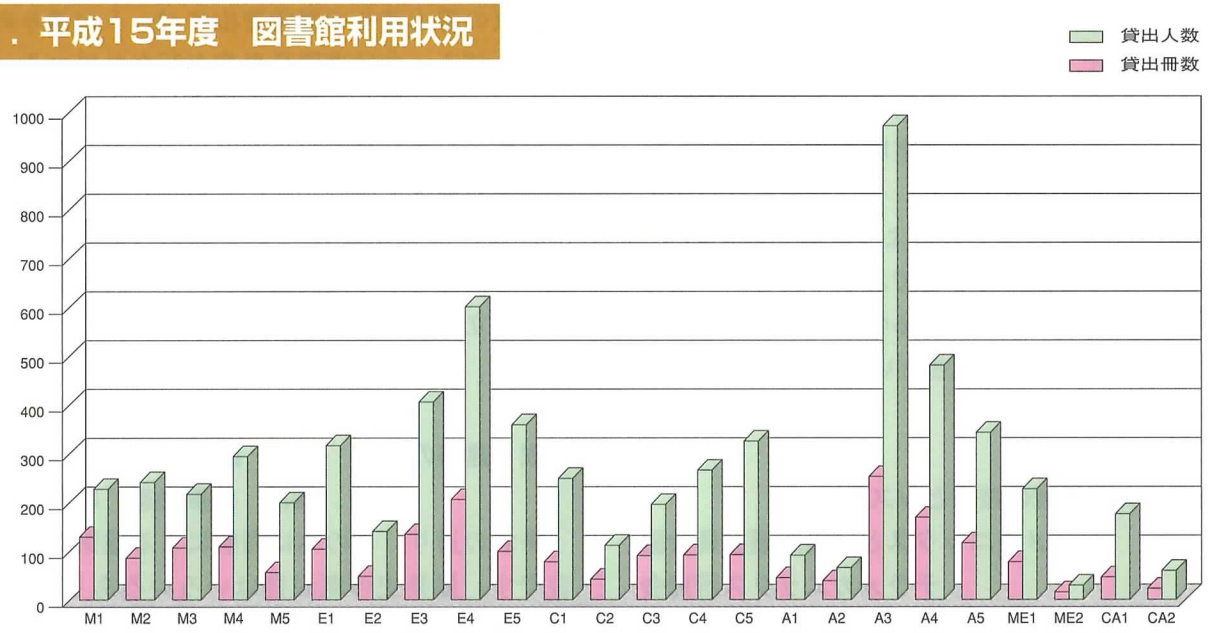
（岡本　二郎記）

貸出図書ベスト10（2004年度上半期）

1	蹴りたい背中
2	蛇にピアス
3	アユの物語（Deep Love；第1部）
4	インストール
4	リトル・バイ・リトル
6	世界の中心で、愛をさけぶ
7	天国の本屋
7	4 TEEN；フォーティーン
7	博士の愛した数式
7	失はれる物語

お　知　ら　せ

1．平成15年度　図書館利用状況



																					専機電		専建設	
学科学年	M1	M2	M3	M4	M5	E1	E2	E3	E4	E5	C1	C2	C3	C4	C5	A1	A2	A3	A4	A5	ME1	ME2	CA1	CA2
貸出人数	127	85	105	108	56	103	49	135	205	99	78	43	90	91	94	44	38	251	168	116	77	12	47	20
貸出冊数	228	242	216	293	198	316	139	402	601	357	248	110	194	266	325	91	66	972	484	342	226	29	175	59

2．第２回呉高専文化セミナーについて

義経像の変遷
―『平家物語』から『義経記』まで―

日　　時：平成17年１月15日㈯
　　午後２時～４時まで
会　　場：阿賀公民館　２階講座室
講　　師：呉高専助教授　小助川　元太
定　　員：80名
参 加 料：無　料
対　　象：一般市民
主　　催：呉工業高等専門学校図書館
申込方法：電話で，12月15日㈬から１月11日㈫
　　までに下記へお申込みください。
　　生涯学習課・義経像の変遷係
　　電話：(0823) 25-3461

3．冬季休業中の長期貸出について

以下のとおり長期貸出を行いますので，ご利用ください。

貸出中の図書は，継続手続（１回だけ可）を行えば長期貸出の扱いとなります。

貸出期間　：　12月９日㈭～12月24日㈮
貸出冊数　：　５冊以内
対　　象　：　一般学生，卒研学生，専攻科生
返却期限　：　１月11日㈫

編　集　後　記

三年前に出版された片山恭一さんの恋愛小説『世界の中心で，愛をさけぶ』が映画化され，300万部を突破するベストセラーとなりました。さらにこの夏ドラマ化されました。ご覧になった方も多いことでしょう。原作，映画，ドラマとそれぞれ内容が変わっていましたが，原作を読まれた方はどのように感じたでしょう。私は，舞台が瀬戸内海沿いの港町で，呉高専のある阿賀によく似ているなと思いながら一気に読みました。時代背景が私の青春時代と重なって，とても懐かしく共感が持てました。さて，今回の図書だよりから読書感想文は学生のみなさんから提出して頂いたものの中から優秀な作品を図書委員会で選定し，掲載することとなりました。掲載されたみなさん，おめでとうございます。

（図書館長補　井上　浩孝）

（表紙撮影：専攻科・森　隆寛）